

出題分析			
試験時間	60分	配点	60点
		大問数	3題
分量 (昨年比較)	[減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較)	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>〈現代文〉</p> <p>本文の分量は昨年と比べて少し増加しているが、設問数は変化なし。昨年の抽象的で難解な文章から打って変わって、今年は日本の近代家族について具体的に記述した文章が取り上げられた。年代や割合などの話題が続くため整理が難しかったかもしれないが、設問は概ね正解を絞り込みやすい。</p> <p>〈古文〉</p> <p>清少納言の紀行文の体裁で創作された、中世ごろの文章による出題。本文の分量は昨年よりやや増加、設問数は1減、解答数は2減。記述1題を含む点は昨年と同じ。著名作品（鴨長明『発心集』）であった昨年と比べると、馴染みのない出典であり、昨年はなかった和歌が2首含まれることもあり、読解・設問解答とも難度はやや高くなった。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>明治時代に書かれた漢文体の手紙からの出題。本文の分量は約300字で、昨年の約2倍。設問数は昨年より1増。本文は、難解な語句に注釈が付いていない箇所があり、読みにくさを感じる。設問は、標準的な知識があれば対応できるものもあったが、内容理解を問うものについては慎重に判断する必要があった。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文 (評論) 貞包英之『サブカルチャーを消費する』	第一次大戦後に日本の家族の代表的類型となった、配偶者だけの家族、親と未婚の子からなる家族を中心とする「小家族」のライフスタイルについて説明した文章。問六は出題意図を把握しづらいが、その他は解きやすい。漢字問題1問、内容説明3問、脱文挿入1問、抜き出し1問、理由説明2問、空欄補充2問の構成。	標準
二	古文 (紀行) 『松嶋日記』	東海道を旅する女性が、近江から駿河への道中を、『伊勢物語』を想起しつつ記したという文章。古典を引用した凝った文体で、解釈は手間取る。空欄補充1問 (枝問3)、文法1問、和歌1問、語釈1問、脱文挿入1問、内容合致1問の構成。	やや難

設問別講評			
三	漢文 (文章) 岡松甕谷『甕谷遺稿』	明治維新において、ヨーロッパの政治制度を導入する中で、政治家や官僚の間でぜいたくが流行し、自らの罪を認めようとしぬ者が増えたことを嘆く内容。内容説明2問、書き下し1問、空欄補充1問、内容合致1問の構成。	やや難

合格のための学習法
<p>〈現代文〉</p> <p>本文のテーマは文化・文明、社会、科学論など様々だが、硬質な評論が出題されることが多い。設問は傍線部内容説明や空欄補充などで本文の展開を問うオーソドックスなタイプが中心である。普段から文章内で提示された内容をきちんと整理できるように、論理の展開や文の切れ目、具体例などを意識して読み解く練習を積んでおこう。</p> <p>〈古文〉</p> <p>出典は有名作品からマイナーなものまで幅広い。ジャンルも、物語・説話や日記・歌論など偏ることなく選ばれる傾向がある。出題形式は、解釈・文法・空欄補充・内容合致が近年では定番となっている。対策としては、単語や文法などの基礎事項を確実に定着させ、その上で過去問や類題に数多く触れ、実戦力を養っておきたい。和歌のウェイトが高い年度もあるので、和歌の鑑賞力・修辞技巧の知識を身につけておくことも求められる。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>標準レベルの語句・句法や語順のルールを押さえれば、正解を導ける設問も多い。ただし本文のジャンルは様々で、分量や設問の難易度には幅があるので、実際の文章の中で広く漢文特有の表現に触れ、内容をはやく正確に把握する力を高めておきたい。他学部のものも含め、多くの過去問を解いておこう。</p>